

255. 瀬田川のアユカケ 2 一船を用いた友釣りの用具と技法一

③ 掛かりアユの扱い

掛かったアユは、オトリザラから船の中に置いてあるタツオケ（図-12：写真-5）と呼ばれる桶に移す。タツオケにはときどき柄杓で水を注いで、中の水を入れ換える。タツオケにアユがたまったら、マルオケ（図-13：写真-6）にアユを移し、岸辺の水通りの良い処に横にして沈めて置く。マルオケの内側には墨を塗って黒くしておく。アユは回りの環境に応じて体色を変化させる。桶の内側を黒くしておく、アユの体色は黒くなる。反対に素木のままであると、アユの体色は白っぽくなる。白っぽいアユは売るときに買い叩かれるため、この様な工夫がしてある。

タツオケに入れるアユは10匹程度が目途である。タツオケは大きな桶であるが、水の循環がないため、そう多くのアユは活かしてはおけない。アユは流れの魚であるため、多くの酸素を必要とするからである。特に、気温の高い時期にはタツオケの水はすぐに悪くなるので注意が必要である。

次々にアユが掛かるような時には、面白いのでついタツオケの水を換えるのを忘れてしまい、気付いたときにはアユが全部死んでしまっていたというようなこともあった。死んだアユは商品価値は全く無いので、自家消費に回すことになるが、氷等を持って行くわけではないので、放って置くと夏の暑さで腐ってしまう。この様な時には、死んだアユを背開きにし、塩をまぶして船の内側に木綿針で刺し、帰るまで干して置いた。これは焼いて食べると、なかなか旨い。

④ 漁の時間

アユは夜が明けると動き始めるので、アユカケ漁も夜明けを待って始める。従って、これに間に合うように家を出ることになる。ポイントが家から近い場合は、道具を全て船に積んで行くが、大石や曾東等の遠い所で漁をする場合は船での行き来が困難であるため、船はポイントの近くに係留して置き、タジと呼ばれる道具箱と、マルオケにオトリを数匹入れたものを自転車に積んで行ったりもした。特に、オトリの状態には注意を払い、酸欠にならないようにわざと動かして水を



写真5 タツオケの使用法



写真6 マルオケの使用法

ゆすったり、水を換えながら行った。

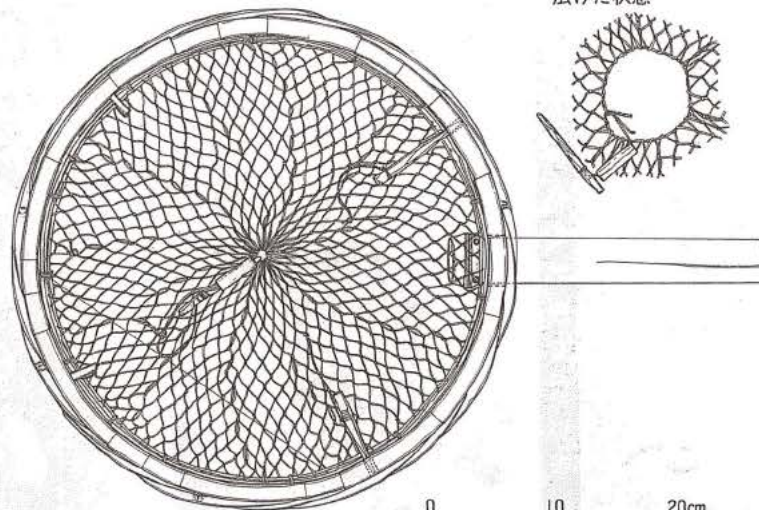
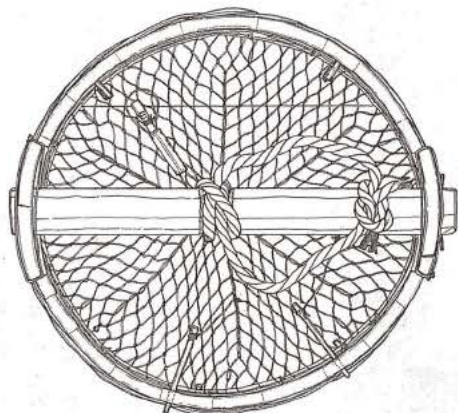
アユは夜明けから掛かり始めるが、水温がやや高くなる午前中が最も良く掛かる。昼になり水温が上がると掛かりが悪くなり、夕方涼しくなると再び掛かりが良くなる。昼の余り掛からない時間帯は、無理をして漁をせず、釣をなおしたり、弁当を食べたり、死んだアユの始末（干物造り）をしたりして過ごした。帰りは、マルオケに捕ったアユを入れてシリツギ（竿の手柄）やカイダケ（操船のための竹竿）を天秤棒の代わりにしてかついで帰った（写真-7）。遠い漁場の場合は、行きと同じようにアユを死なせないように細心の注意を払いつつ自転車で帰った。

⑤ 仕掛のトラブル

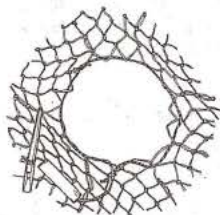
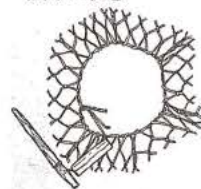
順調に漁が行える時ばかりではない。前述したような竿が折れたりするトラブルがおき、これにその都度対処しなければならぬ事態も発生する。ここでは根



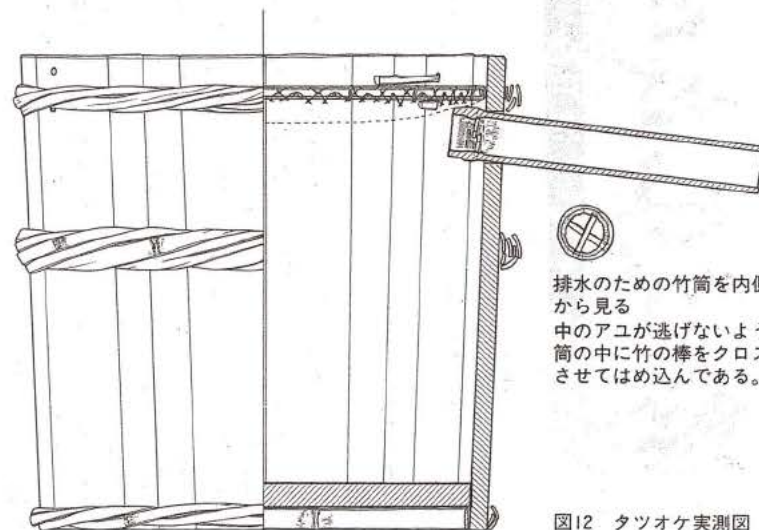
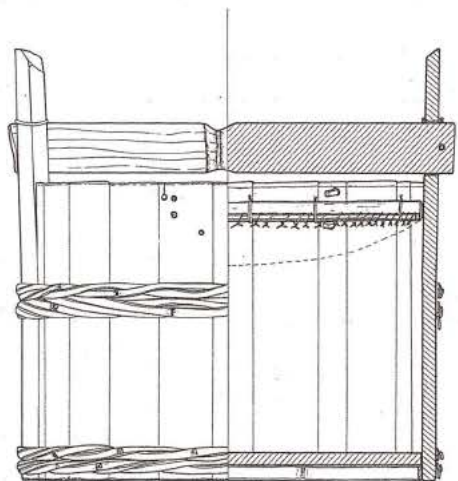
口網の口を閉じた状態



口網の口を最大限まで広げた状態



口網の口を最大限まで広げた状態



排水のための竹筒を内側から見る
中のアユが逃げないように筒の中に竹の棒をクロスさせてはめ込んである。

図12 タツオケ実測図

図13 マルオケ実測図

掛かり（地球を釣った状態）のトラブルに付いて記しておく。

根掛かりには、釣が掛かる場合と、オモリが掛かる場合がある。掛かり方に応じて、はずし方にもコツがある。オモリが掛かった場合はイ：竿を真上に上げてみる。ロ：竿先を奥に突き出してみる。ハ：船を動かして位置を換え、イ、ロを繰り返してみる。ニ：仕掛を切るつもりで引っ張る。

グー、グーとした感じで仕掛が少しずつ動くときは釣が掛かった場合が多い、このような時は道糸に添わせてカイダケを入れてこじってははずす。マノ（釣素）は切れても構わない。オトリが助ければ上々である。

その他にゴミが糸に掛かると、糸がピンと張るので判る。小さなゴミであれば竿を振ってははずすが、大きなゴミの場合は静かに仕掛を上げてははずすしかない。

⑥ 操船

一般的に友釣りは川に立ち込んで行くが、関津の場合、船を用いることに特徴がある。

ここでは漁における操船の概要を記しておく。船に関する詳細は註1文献を参照されたい。

川幅が広く、水深の深い、急流の漁場環境の場合、立ち込みの漁では自ずから限界があり、船を用いた漁が有利となる。船はポイント上に錨で止める。櫓は積んでいるが推進にはカイダケを用い、櫓は殆ど用いず、トモに固定して舵のかわりとする。一度錨を打った後は、錨網の長さや、錨網を結ぶ船の部分により船の位置を少しづつ動かす。

まず、船の前後の移動は錨網の長さを調整することによって行う。普通は船1隻分（約7m）ぐらゐを動かしてポイントを探るが、良く掛かるときは船半分ぐらゐの距離を移動させる。

次に左右への移動であるが、錨網をオイバナのハリの中央に結べば錨の真後ろに船は位置する。ハリの右に結ぶと船は流れを船側に受けて左に移動する。反対に左に結べば右に移動する。さらに大きく左右に動かそうとするときは、錨網をヘサキのハりに同様に結ぶ。この時、舵の代わりに固定してある櫓が船の向きを安定させるために重要な役割を果たす。（図-14）

この様に、一度錨を打つと、錨網の調整によりかなり広範囲のポイントを攻めることができる。一箇所で移動の手段を全て駆使し終えて始めて、錨を上げて移動することになる。錨の打ち換えは一日の漁で3回程度であった。

ただ、この様に自在に船を操ることができるのは、程良い水流のあるところに限られる。水流の弱いところでは舵が利かず船が立たない（安定しない）。反対に、流れの激しいところでは錨を打つことができず船を使うことが困難である。この様な場所では流れの比較的

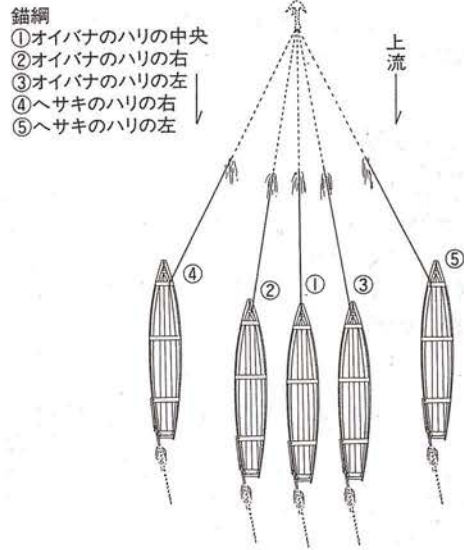


図14 錨網による船の左右の動き

緩い岸近くに錨を打って漁をする。また、川底が岩盤のナメラのところは、増水後にいち早くコケの着く、好ポイントであるが、錨が利かないため船を用いたアユカケ漁には不向きなポイントでもある。

この漁では、アユのすぐ近くに船を浮かべることになるが、船影におびえて釣が逃げるといふようなことは無いということである。

3. アユカケ漁師

関津には船を用いてアユカケ漁をする漁師の他に岸からアユカケをする漁師も居た。船を用いる漁師をフナ漁師、岸から漁をする者をオカ漁師と呼んでいた。

アユカケ漁は瀬田川のような漁場環境（広い川幅、深い水深、急な流れ）においては船を用いた方が有利である。ただ、船には税負担が課せられているため最初からハンデを負っていることになる。また、濁りが出たときなどはイソ（岸）の方が良く掛かるし、ナメラのようなポイントも狙うことができた。また、船に比較して移動が容易なため、良いポイントだけをヒロイガケして型の良い釣をつかんでくる漁師もいた。

船を用いる場合のポイントは、岸から竿の届かない処を選ぶなど、オカ漁師と競合しないところを選んだ。

オカ漁師の用いる仕掛の構成は、基本的には船のものと同変わらないが、竿は長いものを用いる者も居た。また、比較的浅いポイントを狙うため、オモリを用いない場合もある。釣り方で大きく異なるのは、掛けたアユの取り込みの際に、ウケダマ（底に袋の付いたタ

モアミ)を用いることである。ウケダマの中にアユを2から3匹溜めたら、マルオケに移した。従って、タソオケは使用する必要がない。

4. アユの出荷

捕ったアユはマルオケに入れて活かして、関津の近くの魚揚場まで持って行き、ここで、仲買人に渡した。魚揚場に戻ってくるのは大体午後の6時頃で、他の漁師も大体同じ頃に戻ってきたため、魚揚場は漁に関する情報交換の場所ともなっていた。

捕ったアユは大、中、小の3段階に分けて出した。

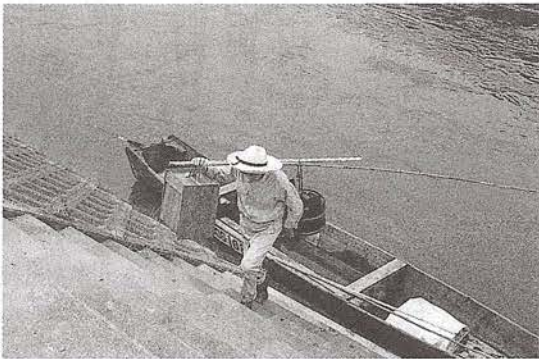


写真7 タジとマルオケを運ぶ

良く売れるのは5月中旬から祇園祭りの頃までで、お盆ぐらいまでは辛うじて売れたが、その後はさっぱりである。従って祇園祭りがすむと仲買人も余り来なくなった。一番良く売れる時期には、石山の旅館などからは魚場まで直接買い付けに来るようなこともあった。

5月川には特別に大きなアユが掛かり(越年アユ: 前述)特大として高く引き取ってくれたが、味は良くなかった。これに対してのぼりアユは味はよいのであるが商品価値は全く無かった。

アユは活かしておかないと全く価値がなく、アガリ(死んだアユ)は売れなかった。アユは弱ると体色が薄れてくる。こういうアユは仲買人がはねてしまう。但し、需要の多い時は別で、この様なアユでも買ってくれた。仲買人は氷を持って来ており、これで水を冷やしながらかけて持って帰っていた。

需要は石山近辺の料理旅館と、京都方面であった。特に京都には多くの活アユが出荷されていたとのことである。

5. 小 考

一瀬田川における船を用いたアユカケの特徴—
船を用いて友釣りをすることは、かつて大河川では

広く行われており、それ自体が特筆される漁労形態ではない。しかし、船で行う友釣りの仕掛の詳細や、漁法に付いての記録は管見に触れた限りでは殆どみることができない。今回、瀬田川における船を用いた友釣り(アユカケ漁)について記録することができたことは、漁労技術の変遷や、漁場環境と漁具の関係を考える上で興味深い成果が得られたものと考えている。最後に、船を用いたアユカケ漁の特徴に付いて若干触れておくことにしたい。

この漁の仕掛の特徴としては、①短めの自然竹をほぼそのまま用いた竿。②大きなオモリ。③太い糸(糸の太さにこだわりがない)が上げられよう。いずれも、現代の友釣りの常識からすると正反対のような特徴である。しかし、これを瀬田川の漁場環境と、この基で採用された船を用いる戦漁という条件を当てはめてみると、この仕掛が合理的に説明できる。

まず、竿の長さや調子であるが、狭い船の中で扱うには長い竿は邪魔であるし、ポイントの真上まで漁師が出向くわけであるから、この意味においても長竿は必要としない。竿の長さは極端な場合、水深の2倍程度あれば漁は可能である。また、掛かりアユを太い仕掛にまかせて、川底から上方に引き上げるわけであるから、アユをあしらいながら、弱らせて取り込む必要もそれほど無い。このため、竿を長くすることによって得られる弾力性もそれほど必要としない。また、先にも触れたようにアユ、オトリ、オモリを急流の中から効率よく上げるためには、竿の弾力よりも竿の強度を重要視する必要がある。このためにも、自然竹を用いた極端な先調子の竿はかえって有利に働くことになる。胴調子の竿では漁にならない。確かに、胴調子の竿はアユを掛けた後のやりとりを楽しむには適しているが、戦漁であるから釣趣を求める必要はなく、取り込みの早い先調子の竿が採用されることになる。

次にオモリであるが、現代の釣法でも急流にオトリを沈めるためにオモリを用いることはある。しかし、これは比較的例外的な釣法であり、オモリの使用はあくまでも補助的なものとして扱われており、主流は、なるべくおとりに負担をかけずに、自然に泳がせるスタイルである(1998現在)。

しかし、このアユカケ漁は巨大なオモリを付け、川底にオトリを一気に沈め、オトリの泳げる範囲をオモリを支点とした30cmから40cmの範囲に限定し、オトリの移動は竿の操作によるオモリの位置の移動によってなされる。

これは、瀬田川の深い水深と、強い流れに対処するために採用されたものとして理解できる。アユは川底の岩の付着性藻類を独占するために縄張りをつくるわけであるから、縄張りは当然のことながら川底の岩の

周辺となる。縄張りに侵入した他のアユを撃退するアユの習性を逆手に取った漁法がアユカケ漁であるから、漁の要件としてオトリをアユの縄張りの中（＝川の底の岩）に確実に送り込む必要がある。船を用いてアユカケをする場合の適水深は1から2m。しかも流れが比較的急な環境の基、道糸を始めとする抵抗の多い仕掛を背負わせたオトリを、確実に縄張りの中に沈めるためには前記条件に負けない質量のオモリを用いる必要があるわけである。

また、このような環境の基でオトリを自由に泳がせたならば、オトリの体力はすぐに消耗してしまい、使用に耐えない状態になってしまうはずである。このために、重いオモリでオトリの自由を奪い、結果としてオトリを長持ちさせる意味も、このオモリには込められている。

そして釣法も、竿によるオモリの上下左右の動きによりオトリを操作し、アユを挑発する。そして掛から

なければ、オモリの位置を移動させることによりオトリを次のポイントに誘導するというを繰り返す。全てがオモリを支点とした操作であるから、オトリに対する負担は極めて少ないはずである（図-16）。また、掛ったときアユはオトリの他に、このオモリも引っ張って逃げなければならないわけであるから、オモリを付けない場合よりは、動きが制約され、取り込みも楽であると考えられる。

先調子の弾力の少ない竿、重いオモリ、この両者は漁場環境と漁労の目的から採用された仕掛であり、この両者の機能を有効に発揮させるための仕掛が、最後の太い糸の仕掛である。確かに、細い仕掛の方がオトリには負担をかけず、釣果も上がるはずであるが、この漁の場合、他の仕掛とのバランスを考えれば、太い仕掛で無ければ用を成さないとはいえない。しかも、太い道糸に対する水の抵抗はオモリが解消するし、オトリ回りの糸の太さは、オトリが自由に泳がないことを

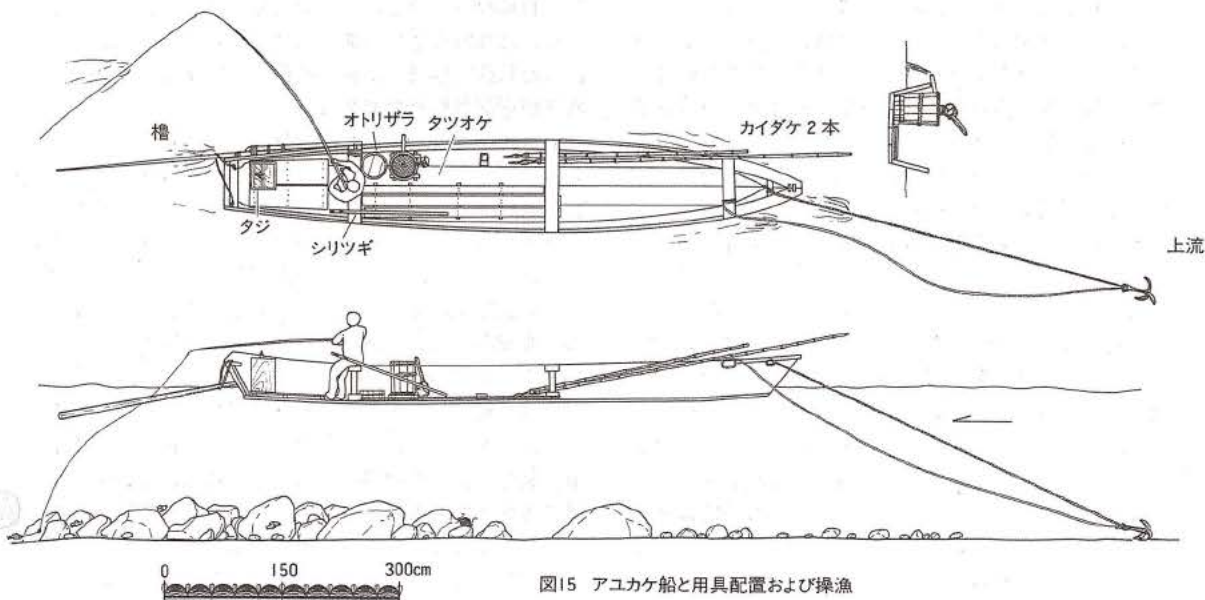


図15 アユカケ船と用具配置および操漁



写真8 アユカケ船とアユカケの用具

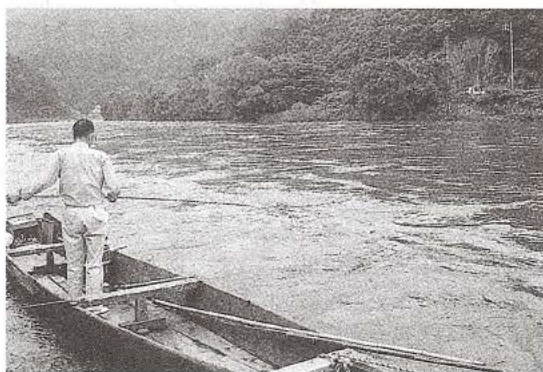


写真9 船からのアユカケ

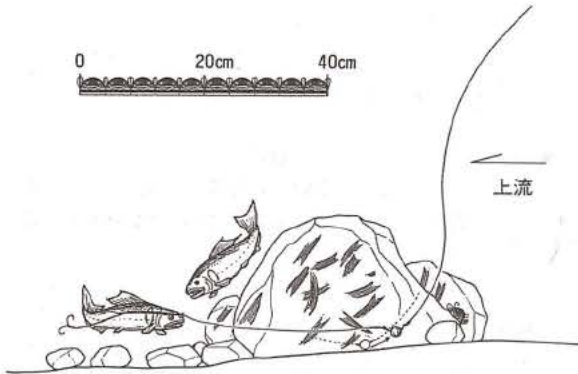


図16 水中での仕掛

前提とすれば、オモリを支点として下流に流されるような状態で、オトリが泳いでいるわけであるから、それほどマイナスに作用するとは考えられない。かえって、掛かったアユを確実に取り込むことを最大要件とする職漁においては、固い竿や、太い丈夫な糸は、非常に有利な条件として捕らえることができる。

ただ一つ念頭に置いておかなければならないことは、この仕掛は、今よりはるかにたくさんのアユがいて、はるかに少ない漁労者しかいなかったという条件下での仕掛であるということである。現代のように、アユよりも釣りが多いのでは、と思われるような処ではその能力は発揮できないかもしれない。

また、オトリの仕掛への着け方が、木綿針によって糸で付けることが注目される。この方法がオトリの装着法としては、初現的な方法であることは間違いないが、何故この方法がずっと採られてきたかについては不明である。同時期の安曇川水系における友釣りでは、既に金属の鼻環が一般的に用いられていることを考えると、奇異な感じがする。この方法に何らかの意図が込められているかに付いては今後考えて行きたい。

最後に友釣りが、職漁として成り立った要因に付いて考えてみたい。アユは、日本人にとって、かなり特殊な想いの込められた魚である。そのため、アユを捕るために、投網、刺し網、曳き網、すくい網、鵜飼い、梁、毒流し、ウケ、ヤス等様々な漁法が考え出されてきた。事実、四万十川、江の川、長良川、紀ノ川等の職漁がいまだに行われている河川の漁法をみると、様々な種類のアユに対する漁が行われているものの、漁の中心は、網、鵜、梁によるものであり、知り得る限り、これらの河川における過去の中心的な漁も、やはり、網漁等釣り漁以外の漁法となっている。

これに対して、瀬田川では友釣りによる漁がアユ漁の中心となっていた。確かに網漁他の方が漁獲性は友釣りに対してはるかに高い。網、鵜、梁等の有利と見える漁法を採用せず、不利と見える友釣りを採用したのはなぜだろうか。

それは、各々の漁法によって得られる、魚体に対する付加価値の差異によるものと考えられる。すなわち、他の漁法によって得られるアユは死んだ状態のアユであるのに対して、友釣りによって得られたアユは活きたアユであるということに尽きる。アユは極めて鮮度の落ちやすい魚である。網漁で捕ったものなどは、流通網の発達していなかった時代にあっては、地理的な制約から、産地の近辺で消費、もしくは加工されて消費されていた。職漁の発達した河川の周辺においては、鮮魚としての利用の他、アユの利用の多くが、アユズシ、焼き干し、塩漬といった加工品が占めていたことが、このことを端的に物語っている。

これに対して、瀬田川において、やや漁獲効率が悪くとも、活きたアユを漁獲し、出荷するという漁労形態を支えたものは、大堰川水系の鮎漁でも指摘されているように、(『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』昭和63)活アユを最上のもので珍重する、京都という特殊な食文化を持つ大消費地の欲求に答え得るといふ、地理的な条件であったと考えられる。このため、活きた状態で漁獲、蓄養、出荷が可能な漁法として友釣りが選択されたのであろう。

活きたアユを最上の料理素材と認識し出したのが、いつのことからなのかについては、今後考えなければならないが、アユの需要が祇園祭り頃までであったことを考えると、初夏の味覚の代表としてアユ、それも若アユを家庭ではなく、優れた調理技法を駆使し、最良の飲食環境のもとで味わいたいという、一部の階層の需要であったとの印象があり、近世以降のことであろうと思われる。

ここで紹介したアユ漁と似た形態で行われていたものに、安曇川水系の安曇川町広瀬、朽木村、大堰川水系の船井郡日吉町の例等がある。これらは何れも、京都に生きアユを出荷するため、友釣りによる漁が行われていた処である。また、多摩川水系においては、江戸時代に、活アユを将軍家に献上するための友釣り漁が行われていた。

以上、瀬田川における船を用いたアユ掛け漁について紹介してきたが、この漁が特殊な需要の基、漁場環境に柔軟に適応しながら続けられて来たことを伺い知ることができた。しかしながら、養殖技術の発達、水質の悪化、流通網の整備、流通技術の発達による活魚の遠距離大量輸送の実現などの社会的要因の変化の前にこの独特の漁法は消し去られてしまった。

文責：大沼芳幸

(滋賀県教育委員会事務局文化財保護課)

実測・製図：大沼芳幸、大沼直子、小林貴子、中川由夏
(ここで紹介した用具は、滋賀県立琵琶湖博物館で保管している)